

主たる参加者



Hans van Ginkel
国連大学学長
国際予防医学リスクマネジメント連盟(URMPM)名誉会員

「人類は今、試練の時代にいます。20世紀後半は、それ以前の時代に比べると世の中が平和になり、人々の生活も豊かになった時代でありましたが、一方、世界の平和と繁栄を目指すという、国連の掲げる目標が、多くの人には見えにくくなった時代でもありました。今の世界には、推定で、一日の生活を約200円以下でまかなわざるをえない人たちが30億人もいて、さらにそのうち13億人もが100円に満たない生活費で一日をしのいでいます。また、一度も学校へ通ったことのない人が1億3000万人、清潔な飲み水さえ手に入らない人が13億人もいます。

国連大学は今、「環境と持続可能な開発」と「平和とガバナンス（統治）」という二つの領域に活動を集約しています。この2領域での研究・研修活動のなかで、食糧・栄養、情報技術、土地利用、気象変動、水不足などの問題から、国際金融市場の管理、都市化、国際機関の有効性、複雑な人道的緊急事態の要因など、多岐にわたる問題と事象を取り上げています。」（国連大学ホームページより）



堀内光子 前 ILO 東京事務所代表、URMPM 顧問

堀内氏は長年ニューヨーク・マンハッタン市を拠点とし、厚生労働省とILOでの勤務を通じて、世界における勤労女性の地位向上を中心に活動を続けています。



清水 英祐 教授

清水英祐 日本産業衛生学会理事長
慈恵会医科大学医学部環境保健学教授、
日本予防医学リスクマネジメント学会(JSRMPM)名誉会員

清水氏は産業での健康に関する日本で最大の医学学会(会員数7千名以上)の最高責任者の任にあり、分子生物学の立場から環境発ガン物質の許容濃度策定などに従事しています。



酒井亮二 URMPM 理事長、JSRMPM 理事長

「今回の国際会議は、東京に所在するいくつかの国際機関から URMPM に対する要請により、1) 工業化の著しい中国、インドといった新興国での環境汚染と労働災害の予防を、これらの分野で世界最先端の活動歴を有する日本を中心に国際協力のあり方を検討することです。同時に、21 世紀に新たな世界的広がりを示している、院内感染を含む各種の感染症の予防対策に関する国際学術交流を国際産官学で行うことに至りました。2002 年 4 月にスイスにて設立を開始した URMPM は、現在欧米ロシアを含む 50 カ国以上の国々と各種の国際機関からの会員により構成されています。本国際会議を通じて、URMPM の志向するグローバルな健康と安全が加速されると期待します。」

酒井氏は東京大学医学部などを中心に長年にわたり研究・教育を行い、ハーバード大学、スイス連邦工科大学、マレーシア理科大学など海外の大学でも研究・教育を行ってきました。現在の主たる関心は、医療でのリスクマネジメントと安全に関する国際的な学術振興です。



Christopher J. Portier, 米国国家毒性プログラム委員長
米国国立環境健康科学研究所(NIEHS)副所長、URMPM Advisor 顧問
米国ノースカロライナ大学特任教授

Portier 氏は米国環境保護庁(USEPA)の研究所の要職にあつて、環境化学物質に関するリスク分析の世界第 1 人者として知られており、また、発ガン物質の環境評価モデル開発部の最高責任者にあります。

同氏は米国ノースカロライナ大学を卒業後、リスク評価に関する米国および海外の様々な委員会の委員を務め、WHO の国際癌研究機構の役員でもあります。米国のトップクラスの大学であるノースカロライナ大学を含む様々な機関より名誉称号などを受賞してきました。



長谷川真一 ILO 東京事務所代表
前 ILO アジア太平洋総局長

長谷川氏は厚生労働省審議官を経て、労働法規の立場から国内外の行政を行っています。



Rusli Bin Nordin マレーシア理科大学歯学部副学部長、
同医学部産業医学教授、
アジア太平洋予防医学リスクマネジメント学会理事長

オーストラリアの医科大学への国費留学を経て、東京大学にて医学博士号を取得し、労働の現場での健康リスク評価とリスク管理を行っています。

「鳥インフルエンザ、津波、戦争、核拡散、環境破壊 このような世界の最も緊急な課題が存在しています。世界がかつて経験しなかった大災害の流行に直面しています。インフルエンザの世界的な流行。私たちは世界からこの大流行に直面しており、各国はかつてない人類の破滅を予防すべきであるという警告の下にあります。津波の脅威は収まりつつありますが、高度な危険地域でのより大きな津波の発生が予想されています。多くの紛争地帯での戦争の残虐さが世界平和への努力を無効にする可能性があります。チェルノブイユ災害は、各国政府が原子力発電所に対してより強固な監視と制御、ならびに核拡散の地球規模の防止を行う必要性を警告しています。最後に、拡大する汚染により私たちの地球が次第に崩壊しつつあります。最近の環境災害が、私たちが地球のセーフガードを失敗してきたことを自然が警告としていることの証明でないのであれば、これは何を意味しているのでしょうか。

この国際会議が環境と労働での健康危機管理に関して貢献できれば幸いです。」



遠山千春 東京大学医学部環境・疾患工学センター環境保健学教授
JSRMPPM 常任理事

国立環境研究所環境健康領域長での勤務を経て、現職。環境の人体影響研究を国内外で行っています。



渡辺知保 東京大学大学院医学研究科人類生態学教授
JSRMPM 常任理事

パングラデッシュの砒素汚染の調査など、環境リスク管理のあり方を人間生態系への影響の観点から展開しています。

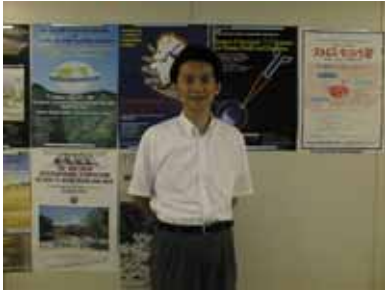


目黒公郎 東京大学生産技術研究所減災工学教授
JSRMPM 常任理事

中越地震、スマトラ津波、パキスタン地震の支援・調査研究を行い、災害危機管理工学の立場から国際的に活躍しています。

車谷典男 奈良医大衛生学教授、日本産業衛生学会理事。

車谷氏は、建築作業者のアズベストによる胸膜中皮腫患者の増加に関する調査結果を最初に報告し、日本社会に環境安全対策の問題提起をしました。



高橋 謙 産業医大環境疫学教授、日本産業衛生学会理事。

高橋氏の主たる研究はアズベストを含む環境発ガン物質のリスク評価とリスク管理です。



Ms. Shirley V. Chaves URMPM 秘書 (コスタリカ)



URMPM & JSRMPM 秘書 (日本)

牧野、東野、北村

This page is maintained by [Ms. Shirley V.V. Chaves](#). To contact me with suggestion, comments and question, please email to [Shirley](#).

(C)2006 URMPM